

4－5	
主題	褥瘡治癒に向けた取り組みについて
副題	画像を利用した多職種協働の促進について

キーワード 1	チームケア	キーワード 2	褥瘡	研究(実践)期間	4 ヶ月
------------	-------	------------	----	----------	------

法人名・事業所名	社福) 高生会 特別養護老人ホーム 明日に架ける橋
発表者(職種)	齋藤久美(看護師)、本間哲郎(介護福祉士)
共同研究(実践)者	五月女匠(サービス科長)

電 話	042-319-1605	FAX	042-319-1620
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	2022年9月新設の特養108名・ショート12名の施設です。「ほっとくけどほっとけない」を法人理念に掲げ、ナースコール一体型見守りシステムや睡眠見守り支援システム、クラウド型介護記録ソフト等のICTを導入しており、過度な介入をせず、ご入居者様が安全に施設生活を送れる様、体制を整えています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

褥瘡がある方の入所（特にポケットが形成されたステージⅢ～Ⅳ）は特養では入所を敬遠されることが多い。その理由として、

① 処置に人手がかかる

② 特養は医師が常駐していない施設が多いため、日常的な褥瘡の評価や投薬が難しい
特に今回当施設に入居された方は、施設では入手が困難な外用薬を処方されており、早期の褥瘡治癒が求められる状況であった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

特養でもチームケアを行い褥瘡ケアに取り組み改善実績を積むことで、医療処置のある高齢者の受け入れを緩和することができるのではないかと考え、チームでの褥瘡治癒に取り組んだ。
また他職種間の意識の共有・促進を図る為に、画像を用いながら1週間ごとに褥瘡の治療経過を評価し、医療職だけでなく毎月開催している褥瘡委員会を通して施設全体で共有することで、施設全体のケアの向上を目的として取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

① 医師と連携し、往診（月1回）で創部状態の確認・外用薬の選択を行う。
定期的な採血で栄養状態の確認を行う。

② 看護師は医師の指示に基づき日々の処置を継続し、創部の状態に応じて洗浄物品の変更や処置の評価を行う。変化があれば適宜医師に報告して指示を受ける。

- ③ 創部の状態に応じて、機能訓練指導員による車椅子（5 種類）・車椅子クッション（3 種類）・ベッドマット（3 種類）の選定を行う。
- ④ 言語聴覚士による回診（月 1 回）で食事形態や摂食状況の評価を行う。
- ⑤ 管理栄養士にて採血結果や体重、食事量から栄養評価を行い、必要に応じてたんぱくゼリーなどの補食を提供。
- ⑥ ユニット介護職員により午前と午後に臥床時間を設けることで除圧を行い、個別に食事摂取の促しや援助を行い、週 1 回体重測定を実施。

《4. 取り組みの結果》

- ・入所後 4 カ月で褥瘡は治癒となった。

処置開始から創部は縮小し、2 カ月経過時に不良肉芽の形成あり。医師に報告し軟膏の変更実施。4 カ月経過時に創部が残り 1 ミリとなるが完全な治癒に至らず、あえて不良肉芽の形成を利し、創部を密閉することで皮膚の盛り上がりを促し褥瘡治癒することが出来た。

・ご入居者様は痛みから、治療に拒否的な時もあったが、自分から側臥位になって下さったり、治癒を終えると笑顔が見られる時もあった。

また治療開始当初は褥瘡改善のための栄養補助食品を吐き出してしまうことがあったが、褥瘡が軽快する過程では見られなくなった。

《5. 考察、まとめ》

・1 週間ごとに評価した治癒の経過を、文字の記録で残すだけでなく、写真を取入れスタッフの取り組み結果をリアルタイムで情報共有を行った。その結果、スタッフも取り組みの結果が得られている事に自己効力感が高まり、継続的なチームケアにつながったのではないかと考える。医療処置であっても、職種を超えての取り組みの重要性や有効性について学びを得ることができたと考える。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

看護師のための褥瘡ケアハンドブック

《8. 提案と発信》

特養では医療物品や検査の実施に限界があるが、職種を超えてご入居者様の治癒に向けたチームケアの結果、褥瘡改善につながり、ご入居者様に笑顔が戻ったことは、施設の強みとして今後の糧としたい。

今回発表に当たり、「褥瘡があるので入所はあきらめていたが、今後施設で褥瘡の受け入れが増えるならば協力したい」と了承頂いた入居者様・ご家族様に感謝し、さらなるケアのレベルアップに努めていきたいと考える。